教育美術・佐武賞 選考を終えて

公益財団法人教育美術振興会
教育美術・佐武賞　担当理事
橋本 光明（はしもと みつあき）
信州大学　名誉教授

３月末日の応募締め切り後から１週間程経った頃に第１回の選考会が開催されました。新学期が始まる多忙な時期のため遠方の選考委員はオンラインによる出席です。このハイブリッド選考会は，コロナ禍が落ち着きつつあった昨年度から取り入れています。ただし，この選考会のスタイルは，４月上旬開催に限って実施することにします。

教育美術・佐武賞の選考の特色は，６人の委員が一堂に会して全員が納得のいく選考結果になるまで時間をかけてじっくりと話し合うこと，しかも選考委員長を選出しないため一人の委員の裁量に委ねることなく審査することです。

４月下旬の第２回選考会（予選会），５月中旬の第３回選考会（本選会）は，とことん最後まで話し合うために４年ぶりに全委員が顔を合わせて賞の可否を決めることになりました。結果は，教育美術・佐武賞は梶川明子氏（岩国市），佳作は村重仁美氏（下関市）に決まり，偶然ながら山口県内の小学校にお勤めのお二人の先生が受賞されました。

今回の実践研究から特筆すべきことがいくつかあります。一つは，過去の教育美術・佐武賞受賞論文との連関性を探し出して新たなテーマで実践研究をまとめたものがありました。本誌掲載の論文や実践報告など先行する研究内容や事柄等を自らの実践研究に生かすことは意味のあることです。受賞した実践研究の条件を変えたり補足したりする，疑問点や課題を明確にして自分の研究課題の位置づけを明確にするなど先行研究から学ぶことは多くあります。

もう一つは，図工・美術の教育に長く携わってきた経験豊富な教員の投稿が珍しいものではなくなったことです。第56回では「アートが子どもを育て，アートで学校を創る！」のテーマで現職の校長先生が応募されました。今回は，39年間の中学校教師を退職後，高等学校の非常勤講として長く勤務されている先生の「鑑賞と表現をつなげる試行と考察」，定年退職後14年を経ての応募「教職37年間の私の教育課題をふりかえり，次なる課題を探る」といた意欲的な実践や貴重な提言がありました。一方30～40歳代の教員の初めての応募も目立ち，全体として年齢のバランスがとれた応募になりました。

三つ目は，時代を先取りする嗅覚や感性などをもった応募者によって常に新鮮な課題について協議する場があることです。

近年，DX（デジタルトランスフォーメーション）やAI（人工知能）という言葉を聞く機会が急増しました。文化庁は，数年前に文化芸術DX戦略を打ち出しました。文部科学省のAI戦略は2019年でしたが，AI技術の社会や教育などへの浸透はこの１年で活発化しました。応募論文を読むと「描画AIやChatGPT等の出現によって，人間が創作することの意味が問われる中…」といった新しい動きに敏感に対応した実践研究に出会います。新型コロナウイルスが全国に感染しはじめた年の応募論文にもプラス志向で取り組む実践研究がありました。

また，応募者の研究の取り組み方や研究のまとめ方，論文の書き方などについては選考会の中で毎年指摘されます。選評をご覧いただければわかりますが，紙幅の関係で一つ挙げるとすれば「著作権」と「肖像権」です。中でも受賞した実践研究は，本号に掲載されます。掲載するか否かにかかわらず応募する場合は，事前に写真・映像等の撮影と掲載の承諾を口頭でなく文書で求めるようにしましょう。

ゲスト選考委員の齋藤亜矢氏からは，子どもの目線に立ったご発言を通じて図工科は何のためにあるのかという教科性を超えて人間存在の起源や尊厳等に関しての示唆に富むお話をお聞きすることができました。活力や実行力とともに客観的，論理的に原因や根拠を追究される先生の研究に対する姿勢からも学ぶことがあり，今後もご指導いただくことを願っています。

最後になりますが，選考委員からより多くの応募を呼び掛けていただきました。本年度の応募数は13点です。最近10年間では平均的な本数ですが，優れた実践研究が毎年選ばれるために応募数を増やすことは言うまでもありません。

日々の授業を振り返り，そこで見出した課題や成果などを考える教師の省察的実践の必要性は以前にも増して高まっています。この実践の繰り返しや習慣化は実践研究につながるものです。そして，研究の成果は教師や学習者へ還元されるものです。応募要項をご一読いただき奮ってご応募ください。

教育美術・佐武賞 選評

ゲスト選考委員
齋藤 亜矢（さいとう あや）
京都芸術大学　文明哲学研究所
教授

筆記具を動かすと痕跡が現れる。なぐりがきをする時期の幼児は，描線を探索するプロセスを楽しみます。表現の原点は，人に見せる作品である以前に，自分のなかで「おもしろい」を見つけ試行錯誤や探索をする行為なのです。「おもしろい」は，固定観念などの枠組みが壊される体験でもあり，新しい価値を創造する表現の本質ではないでしょうか。アーティストの多くは，石ころを拾ってみたり，毎日絵を描いたりして，つねに「おもしろい」を探索しつづけていますが，絵が苦手という人は，上手下手という一元的な評価にとらわれて「おもしろい」に心を向ける感性が鈍っているようにも感じます。

梶川明子氏の論文は，テーマや画材から考える通常の授業設計と対照的に，表現のきっかけとなる心の動きに目を向けた点と，子どもの様子を丁寧に見守り，寄り添っている点が評価されました。子どもが「おもしろい」と感じたものを持ち寄り，そこから創作意欲を引き出す場を教室に設けた。シンプルな試みですが，個々の「おもしろい」を尊重することが自己肯定感を高め，他者の気持ちの尊重や，創作意欲をひきだした様子が伝わりました。一方，絵本を導入とした絵画のとりくみでは，絵が苦手という子に寄り添う絵本の選択や導入のしかたについての考察がもう少し深められるとよいと感じました。

村重仁美氏の論文は，他教科や地域と連携し，時間をかけて課題に向きあう授業設計が評価されました。ポートフォリオによる毎回のふりかえりや相互の作品鑑賞などのフィードバックが試行錯誤をひきだしていることもわかります。先にテーマを与えていますが，生徒が主体的にテーマを見つける展開にできると，より魅力的な授業になりそうです。また客観的な記述と，それを根拠としての考察という書き方を徹底すると，より価値の高い報告になると思いました。

審査をとおして感じたのは，なにをどのように表現させるか以前に，どのようなこころを育むかという視点の重要性です。自然のなかに身を置き，諸感覚をはたらかせながら遊ぶ機会が減った現代において，美術教育で自然素材と触れる機会をつくる意義も増しています。石ころ一つをおもしろがる感性は教育者にこそ必要であり，それが子どもの「おもしろい」を育て，表現を後押しするのではないかと思いました。

プロフィール
京都大学理学部卒業，同大学院医学研究科修士課程修了，東京藝術大学大学院美術研究科修了。博士（美術）。京都大学野生動物研究センター特定助教，中部学院大学准教授などを経て，2016年度より現職。芸術する心がなぜ生まれたのか，進化や発達の視点からアプローチしている。著書に『ヒトはなぜ絵を描くのか―芸術認知科学への招待』（岩波書店），『ルビンのツボ―芸術する体と心』（岩波書店），共著書に『人間とは何か ―― チンパンジー研究から見えてきたこと』（岩波書店），『恋う･癒す･究める　脳科学と芸術』（工作舎），『脳とアート―感覚と表現の脳科学』（医学書院）など。

新井 哲夫（あらい てつお）
群馬大学　名誉教授

はじめに，教育現場のさまざまな課題が指摘される中で，日頃の実践を研究論文としてまとめ応募された方々に，心より敬意を表します。

教育美術賞・佐武賞の梶川明子氏の論文は，幼児教育で用いられる手法を積極的に活用している点，子どもたちの日常の振る舞いやふとした言葉を授業づくりに繋（つな）げている点に特色があり，子どもたち一人一人の特性を十分に理解した上で造形活動への意欲を高め，発想・構想する力を引き出している点や，抽出児の取り組みの様子を簡潔にわかりやすく記述している点が優れていると感じました。欲をいえば，こうした実践を重ねた結果，その後の子どもたちの発想・構想段階の取り組みにどのような変化が生じたのかについても言及していただけると，さらによかったと思います。

佳作賞の村重仁美氏の論文は，図画工作・国語・総合的な時間による教科等連携の実践を図画工作の視点からまとめたものであり，教科等連携のメリットを活かし，地域の人々や自然との関わりを深めたり公共施設を活用するなどして，子どもたちのダイナミックな活動を引き出している点が優れていると感じました。ただ，文面から教科等連携の取り組みの成果であることが十分に伝わりにくい点が残念に思いました。

その他の応募論文では，「和菓子の制作」の実践をまとめた論文は題材としての完成度が高く，文章もよくまとまっていますが，「研究の目的」が「題材設定の理由」になっており，この実践研究を通して何を明らかにしたいのかが明示されていないため，実践報告になってしまっています。また，「造形遊びの授業づくり」に関する論文は，実践研究としてのまとめ方が優れていますが，題材設定の際に児童の興味・関心よりも教師の研究目的が優先されている印象を拭えない点が残念でした。

応募論文を通読して感じたことは，研究の目的を明確にすることの大切さです。それは研究テーマと結論との関係に現れます。整合性に欠けていたり，結論が曖昧な論文は，研究の目的そのものが曖昧であることが多いものです。実践を研究論文としてまとめる際には，研究の目的を明確にし，それに照らして内容を再構成する必要があります。いま一度，実践研究論文の基本に立ち返っていただくことをお願いします。

岡田 京子（おかだ きょうこ）
東京家政大学　教授

教育美術・佐武賞を受賞された梶川明子氏の論文は，特別支援学級における図画工作科の授業づくりについて述べたものです。指導の工夫を示すとともに，それぞれの子供の姿を丁寧に分析，考察されていました。そこからは，子供の思いを大切にした指導を積み重ねながら，子供を丸ごと受けとめようとしている教師の姿が見えてきました。それは，谷川俊太郎さんの文と，ファッションブランド「ミナ ペルホネン」のデザイナーである皆川明さんの絵の絵本『はいくないきもの』を教材にしたことからも感じられました。意味や概念を飛び越えた世界を示しながら，子供たちに「それでいいんだよ」と言っているようで，教材選択からも，溢（あふ）れ出る子供へ思いや願いを感じました。

佳作賞を受賞した村重仁美氏の論文は，他教科領域や地域との連携を踏まえた図画工作科の学習展開の在り方について述べたものです。教科横断的な視点や地域連携の視点をもってカリキュラムを考え実践していくことは，どの学校でも必要なことですが，長年，各教科等の方向から検討を重ねている村重氏の試みは，大変参考となります。往々にして，教科横断的なカリキュラムを考える際に，絵を描く，ものをつくるということが他教科の成果のまとめとして位置づけられてしまうことがありますが，村重氏の実践のように図画工作科の目標をしっかりと踏まえられている点も重要です。

その他，ご応募いただいた論文には，発想や構想，鑑賞など資質・能力の育成，評価の在り方，異年齢の交流，教師主導型の指導の課題，造形遊びの重要性，版画の指導の新しい在り方などがありました。梶川，村重論文だけではなく，どの論文も，日々子供と向き合いながら，感じ考え続けてきたことを根拠とした強さがありました。また，長い教職生活を振り返り，次なる課題を探っているベテランの先生が執筆した論文もありました。こうありたいものだと元気と勇気をいただくとともに，教育美術・佐武賞の豊かな広がりと可能性も感じました。

ご自身の研究をまとめ応募することは，多くのエネルギーが必要です。このように応募してくださる方がいて，造形表現，図画工作，美術の世界は，より充実していきます。感謝を申し上げるとともに，子供の資質・能力の育成を目指し，それぞれの先生の研究が高まってことを願っています。

第58回　教育美術・佐武賞　選評

鷹野 晃（たかの あきら）
山梨県北杜市立明野中学校　元校長

コロナ禍で混乱する教育現場においても，教育実践研究の火を絶やさず，信念を貫き研究活動に取り組んだ応募者の皆さんに心から敬意を表します。実践研究は，子どもから始まり，子どもから学び，子どもに還るものです。今回の教育美術・佐武賞を受賞された山口県の梶川明子氏の実践は，そのことを見事に体現していました。実践研究では先人の研究論文や文献を用います。ともすると，それらが未消化のまま引用されることもあり，机上の文献に気を取られるあまり，子どもから目を離すその一瞬が私は気になっていました。ですが，梶川教諭が選んだ書籍は，なんと子ども向けの「絵本」でした。常に子どもから目を背けず，徹底して子どもから学び，尽くそうとするその真摯な姿勢に感服させられました。

佳作賞の山口県の村重仁美氏の実践は，たいへんスケールの大きな取組でした。同時に「いのち」という今日的な課題に正面から立ち向かう姿が素晴らしかったです。限られた字数の中でまとめなければならない難しさから，推敲の過程でやむを得ず省略したところに，大切な事柄があったのかもしれません。特に，最もポイントとなる「海」や「いのち」というものが「子どもにとって」どうだったのか，さらに知りたいと思いました。応募作品全般では，簡単な表記ミスや言葉の誤用などが気になりました。応募前に，できるだけ多くの方々に査読してもらうことをお勧めします。特に本賞は，所属名を付して応募するので，学校なら校長には，必ず目を通してもらういましょう。

また，子どもたちの作品の力はすごいですね。出来の優劣ではなく，足りない言葉を補ってくれたり，反対に筆者が見逃している大切な事柄を無言で指摘していたりするなど，論文の出来を大きく影響することがありました。また，研究対象の子どもたちの実態やこれまでの学習経験について語る部分で，本当にそうなの？ と思うものがありました。校種を跨（また）いだ造形的な資質や能力の高まりをしっかり俯瞰（ふかん）してとらえるようにしたいものです。

今回の応募者の皆さんのように，子どもたちのためにと真摯に研究に取り組むリアルな現場の姿が本賞を通じて広く発信されることは，教育への信頼をいっそう高めてくれることと思います。受賞者はもちろん，応募者全員，そして教育現場に携わるすべての方々への称賛に繋（つな）がることを期待します。

細谷 僚一（ほそたに りょういち）
京都デザイン＆テクノロジー専門学校　校長

今日，教育現場が疲弊し実践研究を進めることが厳しい現状の中で，熱いおもいをもって教育美術・佐武賞に応募された方々に心から敬意を表します。

教育美術・佐武賞を受賞された梶川明子氏の研究主題は，子供の主体的な創造活動を目指した学習指導の追究です。「見てみてコーナー」や「ひらめきコーナー」などによって子供に諸感覚を総動員して試行錯誤させ，表現意欲を喚起されています。子供の何気ない仕草やつぶやきをフィードバックして，それぞれの子供に応じたより質の高い学習活動の展開を試みられています。「ドキュメンテーション」の作成によって，自らの指導を客観視するともに子供と教師が情報を共有しながら改善に努められています。まさに授業は生きものです。適切な写真や図の組み合わせも手伝って，子供たちの活動の様子が目の前に飛び込んでくるような素晴らしい論述です。

佳作賞を受賞された村重仁美氏は図画工作科教育を中心に据えながらも，教科の枠組みを超えた総合的手法でプロジェクト型の学習を進めようとされています。製作過程の作品を展示することによって，子供同士の相互評価を促し表現と鑑賞をつなげ，子供自身の振り返りと新たな課題への挑戦を促そうとされています。さらに完成作品を地域の公共施設に展示し，地域を巻き込む教育活動を展開されています。授業を超えた様々な評価活動が行われる仕掛けづくりは，これからの学校教育の一つの方向性を示すものだといえます。

受賞には至らなかったものの，心惹（ひ）かれた研究を３点取り上げたいと思います。１点目は，幼小接続による学びの可能性探究や異年齢児の造形活動の試みです。土粘土という素材のもつ多様な特性を活かした実験的なワークショップは斬新に感じられました。２点目は，ICT の積極的な活用を含め様々な鑑賞方法の試みです。子供の取り組む姿や感想から，その教育効果を検証するとともに鑑賞と表現を深く結びつけようとされています。３点目は，自らの長きにわたる実践研究の総括です。時代が加速度をもって変化する中で，過去を振り返り課題をしっかりと見つめ，新しい時代の教育のあり方を模索することは大切なことです。

審査をさせていただき残念に思うことは応募件数の少なさです。佐武賞は研究発信の場であり，交流の場でもあります。新たな研究に刺激されて，より今日的な実践研究が発表される。この好循環を期待するのは，決して私だけではないと思います。

山木 朝彦（やまき あさひこ）
鳴門教育大学 客員教授・同大学 名誉教授

梶川明子氏の佐武賞受賞論文の中にくり返し現れる「ドキュメンテーション」は，書類という意味ではありません。視覚情報と文字情報からなる掲示物やそれを掲示する行為を指す言葉です。子供は「ドキュメンテーション」を媒介に，自分の活動を振り返り，活動の意味を意識化し，「自分は何がしたいのか，何をしようとしているのか」を認識します。言いかえれば，知らず知らずのうちに，子供は自己内対話を始めているのです。同時に，自分の表現行為に没頭していた時には見えなかったクラスの友達の気持ちや創意工夫について,「ドキュメンテーション」から気づかされます。梶川氏の実践論文からは，そうした子供たちの意識の深化が実際に起きたことがわかります。

イタリアのレッジョエミリア市の教育から生まれ，玉川大学の大豆生田啓友（おおまめうだひろとも）教授の普及活動によって広がった「ドキュメンテーション」は，幼稚園や保育所に留まらず，小学校の教育の質的改善に資するものです。本論文はこのことを如実に表しています。

教育実践の研究にとって，学習者や教師の活動や思考を「可視化」することは何よりも大切なことです。この点，梶川氏は「ドキュメンテーション」作成の手法を自らの論述に取り入れ，子供の表現と思考のプロセスをみごとに「可視化」し，考察を進めています。まさに，優秀な論文であることの証です。

佳作賞受賞の村重仁美氏による実践論文は，３つの点で評価に値します。はじめに，高度情報化社会のなかでの図画工作はどうあればよいかという課題に応えた論文だということ。次に，地域の特性を教育に活かす努力を積極的に進めていることが挙げられます。後者について言えば, 本論文に登場する小学校は，歴史に名を残す「壇ノ浦」の海まで約 500 メートルに位置しており，ここで学ぶ子供たちにとって，海は生活の只中（ただ）にあると言ってもよいでしょう。この「海」を題材化してカリキュラムの中心に据えた試みが魅力的です。三つ目は，地球の環境保護を指向する題材開発の姿勢を貫いている点です。

上記の３点共に, 図工教育の「現代化」に資する試みであり，その背景にある考えをまとめた村重氏の論文は，佳作賞授賞に値するものです。

惜しくも選に漏れましたが，鑑賞教育の充実に向けた論文が複数あり，いずれも真摯な取り組みでした。鑑賞教育の充実を図る上でも，今回，チャレンジした方々のさらなる飛躍に期待します。

第 58 回教育美術・佐武賞本選会終了後に撮影
前列左より西村貞一理事長，齋藤亜矢先生，橋本光明理事
後列左より鷹野晃先生，岡田京子先生，新井哲夫先生，山木朝彦先生，細谷僚一先生

第 58 回教育美術・佐武賞を迎えて

教育美術・佐武賞は今回で 58 回目を迎え，様々な校種の先生方から 13 本の実践論文（報告）が集まりました。そして厳正なる審査の結果，教育美術・佐武賞に梶川明子先生，佳作賞に村重仁美先生の論文が選出されました。お忙しい中ご応募くださった先生方，真摯に審査にあたってくださった選考委員の先生方に改めてお礼申しあげます。

当会では，第 48 回（平成25年）から教育美術・佐武賞の成果や実践に込めた“思い”などを『教育美術』の誌面で紹介するだけでなく，贈賞式を開催して受賞者に直接賞状を贈呈するだけでなく，選考委員の先生方と懇談する場を設け，本賞が図画工作や美術教育に取り組む先生方へのエールとなるよう努めてまいりました。

2022（令和４）年５月より，過去の受賞論文の一部を当会ホームページで公開し，先生方の授業研究等に活用していただく取り組みも行っております。また，いずれは受賞者が自ら論文のプレゼンテーションを行える機会も検討していきたいと思っております。

これからも本賞が契機となって学校現場における実践活動が活性化することを願っています。

公益財団法人 教育美術振興会
理事長　西村 貞一

教育美術・佐武賞　受賞者一覧（2012 ～ 2023）

	賞	表題	執筆者	受賞時勤務先
第47回（2012年）	佳作賞	中学校美術科の教科内統合カリキュラムに関する研究	藤原 智也	岡山県
第48回（2013年）	佐武賞	主題を生み出すための鑑賞指導	横山 君子	長野県
	佳作賞	発想を広げ、構想力を深める美術教育についての一考察	大町 香織	北海道
第49回（2014年）	佐武賞	つくり出す喜びを味わうために地域性を生かしながら 試行錯誤できる題材の開発と手立ての工夫	津端 朝宏	新潟県
	佳作賞	肢体不自由特別支援学校における〈楽しい美術〉の授業実践	森田 亮	千葉県
	佳作賞	東日本大震災と図画工作・美術教育 ― 2011～2014 きぼうのてプロジェクトから ―	柴﨑 裕	東京都
第50回（2015年）	佐武賞	人とのつながりをつくりだす版画教育 ～子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作と 版画教育を通して子どもと社会をつなぐ「地域連携」～	上北図工部会 川村 英徳・野坂 佳孝	青森県
	佳作賞	学校から地域そして未来へ ― 小学校・第６学年 「つながろう～アートを通して広がる世界・広がる生き方～」の実践から ―	黒井 美智子	新潟県
第51回（2016年）	佳作賞	肢体不自由児が“自分でできる”美術の授業づくり ―《美術の実態表》と《目標の段階表》による、 個別の題材目標と手立ての設定を方策として ―	森田 亮	千葉県
	佳作賞	子どもの心の安定をめざした図画工作科 学習指導 ～セルフイメージを高揚させるための造形活動を通して～	横田 恭典	福岡県
第52回（2017年）	佳作賞	美術を愛好する心を育てる美術教育のあり方 ～地域活性化アートイベントと学校現場の連携を通して～	井手 淑子	長崎県
	佳作賞	熊本の子どもたちに図画工作科ができること ～イノベーション力を育む一年生の色彩指導～	本山 和寿	熊本県
第53回（2018年）	佐武賞	生活の中の芸術と関わり、表現活動を通して楽しく豊かな生活を創造する 題材の開発と手立ての工夫	古家 美和	兵庫県
	佳作賞	子供の成長を支える美術教育の実践 ～「マイ・イソップ物語」の制作と鑑賞活動から～	潮木 邦雄	静岡県
第54回（2019年）	佳作賞	造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現する生徒の育成 ～造形的な視点に基づいた思考の力を高める指導過程の工夫～	宮田 栄子	岐阜県
第55回（2020年）	佐武賞	美術がつなぐ、子ども・地域・学校 ～学校現場が模索した教科融合型学習の試み～	永松 芳恵	大分県
	佳作賞	表現力を高めるための「対話的な活動」の工夫 ― ピクトグラム制作を通して ―	岡本 真梨	新潟県
	佳作賞	「深い学び」に繋がる中学校美術科の授業 ～造形要素と制作過程を軸にした授業改善と実践～	堤 祥晃	滋賀県
第56回（2021年）	佐武賞	子供が絵に表す意味と指導のあり方に関する研究 ― 量的な基礎研究を根拠とした法則化による描画指導法の検討 ―	花輪 大輔	北海道
	佳作賞	生徒の主体的な社会参画意識と創造性を育む プロジェクト型学習カリキュラムの実践と検討	西澤 智子	香川県
第58回（2023年）	佐武賞	特別支援学級における，子供の「思いをいかす」環境構成の在り方と授業づくり	梶川 明子	山口県
	佳作賞	他教科領域や地域と連携し，子供がつくりだす喜びを味わう学習展開の在り方 ～コロナ禍で表す「海」と「いのち」～	村重 仁美	山口県

※ 第47回、51回、52回、54回は佐武賞は該当者なし。第57回は佐武賞・佳作賞共に該当者なし。